

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念をフロア、事務所等の目につく所に張り出し、意識ができるようにしている。毎年、年度初めに職員会議で理念の確認をし共有を図っている。管理者は気付いたことは職員に声をかけ、日々のケアの中で実践に繋げている。	法人の基本理念である「終のすみか」「迷惑をかけ合える関係」を基に、更に具体化した6項目の「桐の花」運営理念を定めており、事業所内各所に掲示している。年度初めの職員会議で、管理者が中心となって読み合わせを行い理念のポイントを共有するようにしている。開所当初からの理念であり、今後は現状に即した理念の検討も念頭に入れ、職員一同、日々の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との繋がりは法人が大切にしている事の為、職員も意識している。地域のこども園、学校、青年団等が年中行事に慰問を組み込んでくれている為、交流できている。地域の祭りやイベントにも出向いている。隣接している地域交流館(夢草堂)での催し物等に来られる方々とも触れ合っている。	利用者の中には、在宅で暮らしていた頃から法人の行事やサービス等で繋がりがあ人も居られる。事業所での日常生活においても、毎日顔ぶれの違う共用型デイサービスの利用者との交流や、「夢草堂」で出会う世代を越えた交流等、地域の一員として積極的に地域に溶け込んだ生活の場作りに取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	見学や実習の方が多く来られる。認知症の特性やケアのポイント、工夫などを伝えている。通所介護も行っており、地域の認知症の方とご家族のサポートをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の現状や取り組みなどの報告をしている。頂いた意見は貴重である為、議事録や職員会議で周知しサービスの向上に活かしている。ご家族にも案内を出しているが、参加率はあまりよくない。	運営推進会議は2ヶ月に1回定期的に実施されている。市職員、区長、民生委員、近隣住民代表、利用者、家族がメンバーとなり、事業所側からも理事長、管理者、介護職員等できるだけ多くの職員も出席し、それぞれの立場から意見を出し合い運営について検討している。議事録も整備されており、職員間で共有し、サービス向上に活かせるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月、市のサービス事業所連絡会に参加している。運営推進会議には市の職員の参加もある。 困った時には電話で教えてもらっている。	市の担当職員からは、運営推進会議に毎回出席してもらい事業所の実情を把握してもらっている。日常の困り事、疑問点等は電話や直接出向くなど協力関係が築かれている。市主催の諸会議にも積極的に参加し、介護保険情報や他の事業所との情報交換も行い連携を深めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	勉強会、研修会をしている。ケア会議等でも折に触れ話題にしているが、全ての職員が正しく理解をできているかは分からない。声掛け等の不適切ケアにも注意をしているが、普段のケアの中で「？」と思うこともある。 玄関は夜間のみ、防犯のために施錠している。	身体拘束・虐待防止に関する勉強会、研修会を定期的実施している。スピーチロック、不適切ケアの事例について、職員の共有認識を図っている。利用者が不穏状態になった時には、職員間で原因をひもとき、要因を取り除くために状況に応じた抑制しない対応方法を共有し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修に出向いたり、それを会議で復命報告をしてもらったりすることで全職員が学ぶ機会を持っている。不適切ケアも含め、虐待が無いよう、意識してケアに当たっている。入浴では全身の観察を行い、身体的虐待が見逃されないよう心掛けている。不適切ケアに関しては曖昧な部分が多い為、職員間で共通認識が持てるよう、会議等で事例をあげながら話し合っている。	外部研修の復命報告では、全職員の知識の定着と共有を図る機会になっている。共用型デイサービスの利用者もあり、入浴時には身体観察を行い異常の有無を確認している。不適切ケアに関しては、利用者一人ひとりに合った対応方法について職員間で確認し合い虐待の防止に努めている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	昨年、勉強会を持ったが、身近でないためか、話を聞くだけで終わってしまった。個々が理解を深めるまでには至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用開始時に時間をとり、説明をしている。特に苦情に関すること、医療連携のこと等に時間を割いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の意見や要望は日常生活の中で聞くようにしている。直ぐに実行できる(することもあるし、会議で検討されることもある。面会時等はご家族とのコミュニケーションを図り、日々の中で思いをくみ取るように努めている。ご家族が思いを口にしやすいような雰囲気作りや情報の発信をしている。運営推進会議に参加して頂けるようお願いしている。会議で意見を聞いている。	利用者、家族からも運営推進会議に出席してもらい、外部の人に意見、苦情を表せる機会になるようにメンバーを特定せず、毎回全員に連絡している。出された意見、要望は職員会議等で話し合い、反映できるよう努めている。玄関に意見箱を設置しているが、記入しやすくする工夫等も考えていきたい意向である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年に1回程度ではあるが職員面接がある。意見を聞く機会は設けられている。職員会議等で意見を求めてくれる。職員会議には理事長や統括施設長など代表者も出席している。日頃から申し送り時等にも意見を聞いてくれている。職員の個々の意見、職場環境の把握に努めている。意見の言いやすい雰囲気作りをしている。	職員面接は事前にアンケートを取り、それを基に実施している。月1回の職員会議には理事長も出席し、利用者の状況や実情を直に知る現場職員の意見を聞き、“なぜ”を問いかけ、気づきを投げかけ、運営に繋げるように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	向上心を持ち努力していると思うが賃金アップもなく報われていないような気がする。働きやすい環境ではあるが、個々の努力や実績の把握まではしていないのでは…と感じる。若い人は給与ややりがいを重視するので今のままでは厳しい。労働時間や勤務時間など把握、配慮をしてくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	積極的に受ける様、研修の案内を提示し声をかけてくれる。受けたい研修を受けられるように配慮してくれる。職員の分からないことに対し、その都度説明や指導をしてくれる。研修も必要と思われるものを案内してくれる。行ってきた研修は会議時に復命報告をを行い、知識の定着、共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	姉妹法人との交流はあるが、介護職との交流の機会はほとんど無い。研修先でのグループワークなどが唯一の同業者交流と言っても良いと思う。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前の情報収集で本人の困りごとやご家族の要望をお聞きしている。ご利用前に情報に目を通して、不安の軽減に努めている。信頼の構築と情報収集のために会話を多く持ち、傾聴している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	直接話を聞くのは管理者だが、情報からご家族の思いを受け止めてケアに当たっている。良く話を聞いているからか、よく話をしてくれている。良い関係ができているのではないか。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居の申込の時点から、話を良く聞き、ケアマネから情報を貰い、此処を含めた選択肢を提示し、必要な支援の提供に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人ができることは積極的に手伝ってもらい、お互い感謝する言葉が飛び交っている。一緒にできることを行っている。共に生活する人生の先輩として尊重している。知恵を学ぶ機会もあり、「教え」に関して感謝を伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族と情報共有は行っているが、協力的でない家族もある。月1回の園便りにて近況等をお伝えしている。行事にもお誘いし、一緒に楽しむ機会を作っている。遠方からでも足繁く面会に来られるご家族もある。居室に泊まって行かれる家族もある。気軽に話せる関係ができていと感じられる。体調不良時に様子を見に来ていただいたり、ターミナル期には泊まって付き添って下さったりしている。	家族には、毎月、1ヶ月間の様子を伝える「桐の花便り」を届けている。地域との交流の様子や季節毎の健康上の注意喚起、利用者の日常の活動風景等を写真入りで紹介し、更に利用者一人ひとりに対して、担当者が一言コメントを記入した便りになっている。避難訓練の実施報告や次月の行事予定も入っており、家族からも参加予定してもらえよう配慮している。面会や受診付添い、体調不調時、不安定時には家族からの協力をお願いし、本人を共に支え合う関係が築けるよう努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	努力はしているが、限界はある。家族、知人の面会時には遠慮なくいつでも来てもらえるような声掛けを心がけている。歓迎して迎え入れている。住み慣れた地域にドライブで出かけたり、あそこに行きたい、あれを見たいという言葉が聞かれたら、叶える方向で動いている。	利用者は入居後、時間の経過とともに知人、友人との関係性が薄れがちになっている現状がある。本人との日常会話の中で、出身地の地名や昔の知人等を引き出すように工夫し、家族と相談して出向いたり面会に来てもらったりするようにしている。年賀状の時期には、利用者全員に職員が声掛けして思いの一枚を完成させるよう支援し、昔の思いが継続されるよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	相性のよし悪しはある。席や作業などに配慮をしている。作業は内容やタイミングなどに気を配っている。作業に入れない方には孤立しなよう寄り添っている。悪口などを言い始めた時にはフォローや話題転換をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者のほとんどが看取りまで過ごしている。亡くなった次の法人の広報誌で追悼文を載せ、職員の思いを伝えている。法要で家族が集まったから…と寄って下さる家族もあった。ボランティアに来て下さる家族もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中から思いを引き出そうとしている。思いを伝えられない方はご家族に相談したり、職員間で話し合ったりしている。	利用者との日常会話の中から、本人の思いや意向、暮らし方の希望等を把握するようにしている。職員間で把握した情報を共有し合い、本人らしい笑顔を引き出すケアに繋がっている。帰宅願望がある方には、家族から協力してもらい面会時に外食に連れ出してもらう等、本人の気持ちを理解するためのアプローチを重ねられるよう努めている。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	フェイスシートなどを確認している。レクリエーションの中で回想法を行ったりしている。ご家族と話す機会に情報を頂いたりしている。	入居前の本人が築いてきた暮らし方を、センター方式(私の暮らし方シート)にまとめて、本人のバックグラウンドを把握するよう努めている。また、事業所で行うレクリエーションの中に、昔から地域で行われていた行事(花見、盆踊り等)や昔の食べ物等を思い起こさせる回想法を取り入れ、かつての体験が懐かしくよみがえるよう工夫し、今を生きる活力を生み出せるよう支援している。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方は24時間シートにて情報共有している。日々、記録や申し送りにて情報共有をしている。普段の動作や様子から体調の変化が無いかなを観察をしている。毎月の会議でも確認しあっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の意向確認は計画作成担当者が行っているが、課題の抽出やサービス内容等は会議で話し合われている。モニタリングは居室担当者が行ったり、広く皆の意見が反映されている。	入居者一人に職員3名が居室担当として関わることで、本人の心身状態を詳しく知ることができ、職員間の気づきにも繋がっている。計画作成担当者は課題が出てきた場合には現状に即したプランを立て、アセスメントは全職員で行い、業務日誌などで情報共有し、現状にあった安全と利用者本位の姿勢で日々のケアに生かせる介護計画になるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常の様子は皆が記録し、確認し、情報共有を図っている。ケアの向上に役立っていると思う。気付いたことは、その都度、情報共有され検討されていると思う。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれ育つニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が都合付かない時の受診を支援したり、希望があれば買い物やイベント等に連れて行っている。通所介護事業でも家族の急な用事にも対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事や近隣の施設(公園等)に出かけたり、青年団や子供たちの慰問などで交流したりしている。ボランティアの受け入れもしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に2回、訪問診療を受けている。体調不良時はファックスや電話で相談をして必要に応じて往診に来ていただいている。気がかりな事はご家族にも報告している。	協力医療機関である浦佐診療所の医師から往診をして貰っている。急な体調不良の場合でも対応可能となっている。緊急時には土日でも24時間オンコールで看護師が対応できる体制になっており、利用者と職員の安心となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	月に2回の訪問診療や月に2回の訪問看護師による健康チェック時に、日々の様子を伝えている。心配事は気軽に相談をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した時はこまめに面会に行き、看護職とコミュニケーションを図りお互いに情報交換に行っている。退院が決まった時には注意事項をきちんと確認しているし、不安な時には電話で確認している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に意向確認をしている。亡くなった方があった時には、その経過を報告し終末期の対応の紹介をし、家族の終末期をイメージしてもらうようにしている。その際にも意向を伺っています。ご本人にも、亡くなった方を見送る際に、尋ねている。	重度化した場合の指針と看取りケアについても同意書があり、入居時に説明を行っている。グループホーム併設の地域交流伝承館「夢草堂」は、お寺の本堂を移築した建物で日々の祈りや信仰の場となっている。開設以来ここで看取った方と利用者の最後のお別れの場となっており、実体験を通して終末期の在り方を考える場となっている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルはあるが、訓練は行っていない。いざとなると動けない気がする。何かあった時は管理者に連絡を取り、指示を仰いでいる。AEDの訓練は年に1回、行っているが、事業所内には無いし、事業所内では実用的ではないと感じてる。	急変や事故発生時のフローチャートが準備されており、管理者からの確に指示が出せる体制になっている。年一回消防署によるAEDの研修も行われている。AEDは隣接のケアハウスに設置されている。看護師とは24時間オンコールで対応できる体制になっており、利用者の体調管理について連携がなされ一人ひとりの対処法について指導を受けている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、昼夜のどちらかで避難訓練は実施している。消防署には必ず参加してもらっている。地域の消防団にも声をかけているが、来て頂けない。運営推進会議の一つとしており、地域の方に見て頂いて意見を頂いている。	年に2回昼夜を想定した避難訓練を行っている。運営推進会議で近隣住民6軒から協力の申し出があり、避難時の連絡網に加わっている。地域の消防団からの訓練参加が得られないという現状もあるが、今後は事業所への理解と協力を地道に働きかけていく意向である。事業所併設には法人の他事業所があり協力体制が築かれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格の尊重に配慮しつつ親しみを持った声掛けを心がけている。気をつけているつもりだが、できていないと感じることもある。介護では不適切ケアについて話し合う機会を持ち常に振り返りをしている。	職員1人が3人の入居者を担当することや情報共有で利用者個々の生活歴や人物像などをより理解した上で、人格を尊重したケアの実践がなされている。その上で職員同士の気づきや管理者の指導の下、資質向上に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	介護者が勝手に決めることなく、自己決定できるよう働きかけている。日頃の会話や行動の促がしの際にも選択肢を設けたり、質問の仕方を工夫したりしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人のペースを大切にしているが職員の都合に合わせてしまうことがある。本当に本人の希望に沿っているか、考えてしまうこともある。本人の行動パターンを考え、食事や入浴の時間に間に合うように配慮した声掛けをしたりしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個性のある物を着ている。衣類の乱れをさり気なく直したり、鏡を見ながら直してもらったりしている。イベント時は普段と違う物を着たり、スカーフを着用したり、おしゃれをしている。本人が選んでいるが、不自然な時はさりげなく助言している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	会話の中で好き嫌いを聞いたり、食事の様子から好みの把握を心がけている。誕生日には好みの物を用意したり、季節の行事では行事食を取り入れたりしている。話を聞きながら準備を進めたりしている。野菜の皮むきやカットなどの下ごしらえや盛り付け、下膳や食器拭き等を一緒に行っている。ホットプレート料理や鍋など、自分で箸を伸ばして食べるものは楽しそうである。	食事づくりの手伝いや後片付けは利用者の日課となっており、厨房で洗った食器を利用者3人がとても楽しそうに会話をしながら拭いていた。また食事中もみんなで和気あいあいど「おいしいね～」と言いながら食事を楽しんでいた。そして何よりも利用者の笑顔があふれた賑やかな食卓であった。季節感の楽しみもあり、ちまき、ぼた餅作り、夏には特産の八色スイカやトウモロコシを楽しんだり、鍋物、おでんなど地の利を生かした食生活が営まれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	野菜をふんだんに使っていると思う。肉や魚も毎日しっかり摂れている。咀嚼の能力に合わせ、形態の工夫をし皆と同じ物が安全に食べれるようにしている。水分もしっかり摂れるよう、時間や内容等を検討している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	要介助者は歯間ブラシや舌ブラシ等を使用したり、口臭の強い人には洗口液を使う等、きちんとケアできているが、自立の方の口腔内の観察がされていない。自立の方も義歯の洗浄剤を使用する際にきちんと洗えているか確認している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のチェック表を用いパターンを把握して、トイレでの排泄を心がけている。パッドの汚染確認や手を洗わない方の支援など、清潔への支援をしている。	職員は排泄パターンを把握して一人ひとりの自立度に応じて声掛けやパット確認などを行い、トイレでの排泄に向けた支援に努めている。ホットタオルの使用などで清潔の保持を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い物を摂ったりヤクルトやココアなどを取り入れたり、飲食物で工夫している。水分を多く摂ってもらっている。毎日体操を時間を設けているが、個々に応じているわけではない。医療からの指示の下剤がきちんと使い、腹部マッサージ等しながら、必要以上に苦しい思いをさせないようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望がある人はそれに添うようにしている。入浴の誘いを拒む人もあるが、清潔が保てるように無理強いにならないよう、言葉かけに工夫をしながら支援している。	浴室内は整理整頓されており、利用者が気持ちよく入浴できる環境となっている。事業所では週2回の入浴を心掛けており、曜日に関しても希望に沿うよう対応している。拒否のある人に対しても希望の時間帯に入浴できるように支援している。また季節ごとにゆず湯や菖蒲湯を楽しんだり、市販の入浴剤での入浴も楽しめるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はできるだけ活動できるよう支援している。が、眠気がある時は少しでも休むよう、声をかけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	それぞれの把握はできていないが、配薬箱の横に薬の一覧表を置いてあり、いつでも確認できるようになっている。説明書は医療ファイルに閉じてあり、処方薬の変更が確認できるようになっている。飲み込むまでを確認し、飲み残し、落としが無い様に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人に合う役割(家事作業等)をお願いしている。感謝の言葉を伝え役割を意識してもらっている。ちまきやぼた餅づくりなどは張り合いになっていると思う。散歩、買い物等気分転換が必要な時は随時支援している。それぞれの趣味を活かされると良いと思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	外出は人手が必要な為、日常的には難しい。希望時にはできるだけ対応しているが、あまり「行きたい」と言う人がいない。行く人、出来ない人、分かれている。出れる時に誘っている。家族とドライブに行ったり、食事に出かけたりする人もいる。	事業所は自然環境にも恵まれ魚沼の山々が見え、美術館や八色の森公園もあり、日常的に散歩などが楽しめる環境となっている。天気の良い日でもサンルームからは魚沼三山が目の前に見え、買い物に関しては周りに農協の直売所やパン工房とカフェもあり、敷地を出ればすぐにでも行ける環境となっている。工房やカフェではイベントの企画もあり地域の人との交流の場となっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には職員が預かっているが、手元で持っていたい方は、家族の承諾を得て数千円程度持っている。買い物希望があった時は一緒に買いに行くこともある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの訴えはほとんど無い。希望がある時は対応している。荷物が届いた時にはお礼の電話をして話をしてもらっている。年賀状は毎年書いている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	広すぎない空間が家庭的な雰囲気や落ち着いた感じを出していると思う。それぞれの好みの室温にも配慮している。季節の花や置物を飾り季節を感じてもらっている。窓から見えたり聞こえたりする情報に生活感を感じることができる。場所を示す表記も見やすい高さになっている。 畳のスペースがあり、脚を伸ばしたり、コタツを置いたりしている。	事業所はふんだんに木材が使われており暖かみを感じられる。共用空間には、L字型リビングの真ん中に畳の部屋があり炬燵も設えており昼食後の昼寝も気持ちよく休めそうである。きちんと間仕切りが設けられており、リビングと昼寝の空間を分け、それぞれに時間が過ごせるようにしてある。廊下も広く車イスでもすれ違いができる広さとなっている。廊下の壁面には各居室が分かりやすいよう表札風に大きな文字の名前や自分の作品やイベントの写真が飾られ、訪れる人に普段の様子が分かるようになっている。落ち着いた中にも笑顔と会話のある家庭的な雰囲気の空間となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	園全体が狭い為、一人になれる場所というのは少ないが、山や公園が見えたり、農協の店が見えたりするサンルームで一人の時間を過ごす人が数人いる。時には2～3人で会話を弾ませていることもある。隣接しているお堂にて過ごす人もいる。リビングでは自分の場所はなんとなく決まっているが、空いている時は自由に座っていつもと違う隣人と会話を楽しんでいることもある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の時に家で使っていたものを持って来て頂いてよいことを伝えている。本人の能力に応じ、本人・家族と相談し、安全に過ごせるように工夫・配慮しており、その為に最小限の物しか置いていない部屋もある。居室で一人で過ごす際にも寂しくないよう家族の写真やここでの写真などを貼っている。	居室は利用者の希望に沿って畳とベット両方に対応している。押し入れも広く収納が十分である。きれいに整理整頓され安全面にも配慮がされている。壁面や家具の上には、もとも持ち込んだ写真や飾りの他にも面会に来られた方との写真を撮影して残すことで、認知症状が進んだ方にも思い出してもらいきっかけとして工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	日々の生活の中で気づいた点はできるだけ早く改善策を講じている。福祉用具を取り入れたりもしている。麻痺等、身体的に障がいのある方には、自力で安全に過ごせるための工夫をしている。		